

ないことを見ている。本症例に於ても顔面萎縮の少ないことが肯ける。然し舌筋に於ては舌下神経を切断しても三叉神経よりの副交感神経の残存の為に筋萎縮は阻止せられることを実験的には認めているに拘らず臨床的に進行性球麻痺に於て運動神経性支配のみの障碍であるのに数年間に極度の舌筋萎縮の惹起せられることについてその原因を明らかにはしていない。

治療として延髄の平流電気療法、内服薬として硝酸銀、エルゴチン・ストリヒニン、沃度加里、亜硫酸が成書に記載せられてをり、殊に亜硫酸は神経強壯剤として最良なりとせられている。更に従来進行性球麻痺の報告例にはワゴスチグミンを屢々使用せられている。本症例に於て当初平流電気及ストリヒニン内服を行い、次いで砒鉄丸内服、ワゴスチグミン注射及びビタミン B₁ 高単位静注を長期間持続的に使用し自覚的には摂食の容易となつたことを訴えたが他覚的所見の好転は認められなかつた。本症は延髄に於ける神経核

の変性萎縮によるものであつて早期に加療を行えば症状の進行を阻止することを望み得ようか本症例の如く典型的に症状を具備するに至つたものに於ては治療上の効果はあまり期待出来ないのではないだろうか。自覚的に軽快感を覚えたは砒鉄丸、ワゴスチグミン、高単位ビタミン B₁ (100mg) の何れによるものか不明である。

結 語

44才の農婦に見られた典型的な進行性球麻痺症例を報告し些かの考察を加えた。

(本論文の概要は昭和28年10月4日第1回耳鼻咽喉科学会中部連合地方会に於て報告した)

文 献

岡 島 敬 治：解 剖 学
 梶, 坂 本：内 科 学
 梶 健：自 律 神 經 系

プラマー・ヴィンソン氏症候群の1例

昭和29年3月31日受付

信州大学医学部耳鼻咽喉科学教室 (主任 鈴木教授)

宮 島 健 郎

A Case of Plummer-Vinson Syndrome

Kenro MIYAJIMA

Department of Otolaryngology, Faculty of Medicine, Shinshu University.

(Director: Prof. T. Suzuki)

A case of Plummer-Vinson syndrome was reported. A woman 34 years of age first visited this clinic on January 20, 1954 complaining of dysphagia which had been gradually increasing during last two years.* Severe hypochromic anemia was found in the blood examination. Esophagoscopy showed, however, no organic lesion along the whole length of oesophagus. Administration of reduced iron cleared up her complaint after 5 weeks.

諸家の記載にも見られるように、1914年に Plummer は嚥下障碍を伴う婦人の低色素性貧血を発見。次で 1922年 Vinson は Plummer の所見を追加、爾来低色素性貧血を伴う嚥下障碍に対して、Plummer—Vinson 氏症候群なる名が付けられるようになった。本症候群は外国では、殊に英米では屢々その報告があるが、本邦ではまだ余り多くないようである。私は最近本症候群の1例を経験したので、茲に報告する次第である。

症 例

患 者：丸山某，34才，婦人，

初 診：昭和29年1月20日。

主 訴：嚥下障碍。

既往歴：生来虚弱で、14.5才頃から医師に貧血症と云われ、結婚後その為に2回人工流産をうけている。又1昨々年、胆石症の手術をうけている。月経も不順であると云う。

現病歴：1昨々年正月、餅を食べたところ、右頸部から食道にかけて、つかえるような感があり、爾来固形物を食べる毎に、胸につかえるような感がつき、又酸味のあるものを食べると、食道から右肩にかけて放散

する痛みを覚えるようになった。14.5才頃から貧血があると言われていたが、当時別に自覚症は無かつたと云う。而るに20才頃から時々皮下出血あり、又歯齦出血があるようになった。嚥下障碍は昨年から次第に増強し、患者は不安に駆られて全年6月某病院を訪ずれたところ、食道に潰瘍があると云われ、プローベをとられ、癌を否定されたと云う。その後某医に慢性食道炎と云われ、約2ヶ月医治を受けたが軽快せず、転々と医を代えてみたが却つて嚥下障碍は募る一方であつたので、本年1月20日遂に当科を訪ずれるに至つた。

全身所見：体格中等度で、皮膚は蒼白を呈し、殊に臉結膜に於て著明である。一見して貧血症あるを知つた。心部に貧血性雑音があり、爪甲は扁平で、僅かに脾腫がある。ワ氏反応は陰性で、尿所見にも変りはない。

局所々見：後咽頭壁は乾燥し、咽頭粘膜も亦蒼白である。舌は稍滑らかな感を呈し、右上部犬歯の欠損がみられる。その他には著変を認めない。

診断：血液検査の結果、低色素性貧血である事が分つた。即ち赤血球数233万、血色素量30%、色素係数0.94で、白血球には著変がない。血液は粘稠性で水分に富み、赤血球不同、変形等がみられた。嚥下障碍と低色素性貧血の2つから、Plummer—Vinson氏症候群である事が分つた。

処置及び経過：1月28日入院、翌29日食道鏡検査施行、食道粘膜に軽度の貧血を認めるのみで特別の所見はない。直ちに鉄剤衝撃療法を開始した。1週間目頃から臉結膜に血管が見え始め、酸味のもを食べても、今迄のような痛みから不快感に変わった。血像も稍々良好となつてきた。10日目頃から赤血球数は300万台となり、血色素量も40%台に上昇、顔色は入院時に比し、著しく良くなつてきた。酸味のもも容易に食べられるようになり、固形物のつかえるような感も大分とれてきた。2月8日家庭の事情で退院、爾來4日置き位に通院治療をうけることになつた。外来では鉄剤の他に卵胞ホルモンを併用してみた。2月22日来院、以来医治をはなれたが、その時の血像は赤血球数420万、血色素量76%、赤血球不同、変形等も殆んど消失、之に平行して嚥下障碍もなくなつてきた。唯肩こりは依然として拗拗に残つていた。

考 按

1) 年齢・性別：一般に中年の婦人に限られ、男子には極めて稀であると云われている。しかし Johnson¹⁾の如く、本症候群の出現するのは通常15才から20才頃であるとするものもある。私の症例では34才の中年婦人であつた。

2) 発生原因：内分泌説、ヒステリー説等の仮説が

あるが、本態は未だ不明である。私の症例では鉄剤に卵胞ホルモンを併用してから、症状の比較的軽快をみた点、及び本症候群が殆んど中年の婦人に限られている点等からみて、矢張り婦人の内分泌が多分に関係をもつているように思われる。

3) 臨床所見：本症候群の主症状は諸、家も云うように、低色素性貧血及び嚥下障碍の2つである。之に随伴症状として、口唇及び口腔粘膜の退行、舌炎、滑らかな舌、口角裂創、歯牙の早期脱落、爪甲の扁平乃至匙状爪及び脾腫等があげられている。私の症例も主症状の外に、滑らかな舌、歯牙の早期脱落、爪甲の扁平、脾腫、肩こり等の随伴症状がみられた。唯主症状である嚥下障碍が比較的軽微であつたが、Johnson¹⁾は本症候群でも時に嚥下障碍の軽微のものもあると云つている。又牟田²⁾は随伴症状は必ずしも著明ではないと云つているが、之が寧ろ一般であるように思われる。次に食道の所見であるが、本症候群は食道に何ら器質的变化を認めないのが普通であると云われている。しかし Cordray³⁾、Johnson¹⁾等の如く食道の器質的变化を重視しているものもあり、Jackson, Gerlings, Mosher等(文献④より引用)は食道に器質的变化ある症例を報告している。私の症例では食道に特記する程の所見はみられなかつた。

4) 予 後：一般には良好と云われているが Johnson¹⁾が之は癌の前駆をなす状態であると云つている事は注目に価する。

結 語

34才の婦人、鉄剤に卵胞ホルモンを併用することにより、軽快せしめる事が出来た、Plummer—Vinson氏症候群の1例である。

(鈴木教授の御指導と御校閲を深謝する)

引用文献

- 1) Johnson, L.: Certain Considerations on dysphagia associated with anemia, Ann. Otol. etc., 47, 809, 1938. 2) 牟田: 耳鼻咽, 21, 137, 昭24. 3) Cordray, D. P.: The Plummer—Vinson Syndrome, Ann. Otol. etc., 49, 160, 1940. 4) Kernan, J. D.: Plummer—Vinson Syndrome with Report of Esophageal Findings in Several Cases, Arch. Otolaryng., 32, 387, 1940.